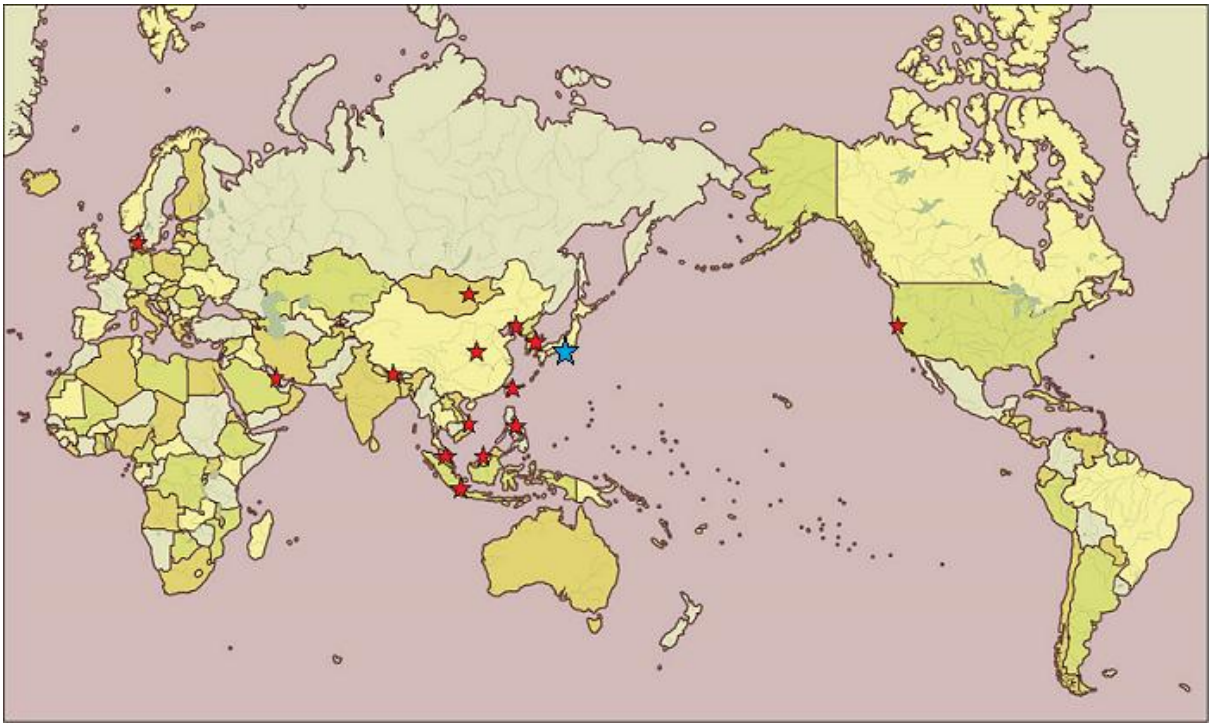
平成 27 年度和歌山県立日高高等学校

国際交流のあゆみ



日高高校　教育開発部

目次

日高高校から世界へ

ページ

1　カタール訪問　【3 月】　・・・・・・・　1

2　マレーシア　スリアマン校主催

Environmental Youth Leadership Summit 参加　【4 月】　・・　6

3　中国　大連第 16 中学訪問　姉妹校提携を結ぶ　【5 月】　・・・・　13

4　姉妹校　中国　西安中訪問　【10 月】　・・・・・・・　17

世界から日高高校へ

1　台湾　台北市　敦化國民中学訪問団来校　【5 月】　・・・・・・・　25

2　アメリカ　日系 3 世　2 名来校　【7 月】　・・・・・・・　25

3　デンマーク姉妹校　フレデリクスハウン高校訪問団来校　【10 月】　26

4　アジア・オセアニア高校生フォーラム　【11 月】　・・・・・・・　33

5　Jenesys 2.0 中国高校生訪日団　来校　【12 月】　・・・・・・・・　36

6　さくらサイエンスプラン　【12 月】　・・・・・・・・　38

7　マレーシア　SMK　SEKSYEN 9 校　来校　【2 月】　・・・・・　39

日高高校から世界へ

１　カタール訪問　【3 月 20 日～27 日】

2015 年度、日高高校創立 100 周年を記念して開催した『アジア高校生フォーラム』に参加してくれた Alwakra Independent Secondary School for Boys 校からの招待で、生徒 2 名と引率教員 1 名で訪問しました。

カタール研修

２年５組　花光　明

１日目

ぼくは、カタール研修にのぞむ前、カタールについて単に産油国であるといったイメージしか持っていませんでした。日本の秋田県と同じ大きさと聞いていたので、まさか日本と同程度もしくはそれ以上に発展しているとは思ってもいませんでした。しかし、実際のところ、場合によっては日本以上に発展した国であるということが分かりました。また、現在発展している国にもかかわらず、伝統的な施設や文化なども数多くありました。

関西国際空港から約十二時間かけてハマド国際空港へと向かいました。

二日目

ハマド国際空港

ついたのはカタールの時間の午前四時頃、ここ最近できた空港と言うこともあり、設備も整っていて、そして何よりとても広かったです。しかし、日本に比べて、接客の面で問題があると思いました。たとえば、日本のように丁寧に接客してくれるのではなく、言っていることが人によって異なっていたため、日本人の接客態度がいかにいいかと言うことが分かりました。全体的にきらびやかな内装で、日本の空港との規模の差を思い知らされました。

朝４時だというのに、たくさんの人がいましたが、日本人の方は、乗り継ぎで別の国に行くことが多く、ほとんどの方が外国人でした。設備面は非常によいと思いましたが、職員の接客態度がもう少しよかったらと思いました。

アルワクラ独立男子学校

日本の学校とは少し異なった外装でした。生徒のほとんどがスクールバスで登校し、自転車で登校する生徒がいないということも、日本とは違う点の一つでした。カタールは王国なので、学校には、現在の首長と元首長の肖像画が掲げられていました。学校の他にも、発電所や、医療センターなどの施設にも、二人の肖像画が掲げられていました。教育面でもかなり進んでいて、国際バカロレアに認定されているということでしたが、授業の内容は日本と同じような内容であったため、日本の授業の精度の高さについて驚きました。また、壁に元素の周期表や、歴史的偉人の名言などが提示されており、日本には

ないような教育に対する工夫がいくつかあり、日本もそれらを導入していくべきだと思いました。また、スポーツ面でも進んでおり、サッカーの試合や専門学校などで少し見ただけですが、文武両道に取り組んでいる生徒がたくさんいるように思いました。

イスラム文化センター

ここはイスラム教の歴史についての書籍や資料、コーランなどを展示しており、イスラム教について深く知ることができました。ここでは、職員の方から英語でイスラム文化についての講演を受けました。しかし、個人の考えを交えていたため、ぼくの考えとは異なっていたり、よく分からなかったりしました。また、アラビックコーヒーを初めて体験しました。それは、コーヒーというよりは、日本茶に近いような味でした。

イスラム博物館

この博物館の展示品は、カタールで出土したものではなく、インドやシリア、エジプトなどのカタール周辺で出土したものでした。４階建てで、日本にある博物館の何倍も大きいように思いました。ルーブル美術館のデザインを手がけた建築家がデザインを手がけており、海に浮かんでいるような外装に目を奪われました。

展示物は、宝石やコーラン、陶器などが多く、とても楽しめました。当日は一日中雨が降っており、カタールでは、雨が降るのは年間に５，６回で、その上、一日中降ることは年に２回か３回だそうです。カタールの人たちには傘をさす習慣がないようで、誰一人として傘をさしていませんでした。特に印象に残っているのは、何億円もするという宝石でできた短剣です。

スークワキーフ

ここはカタールの伝統的な市場で、民族衣装から絵画まで幅広い品揃えでした。中東と聞いたら、イメージできるスパイスなどのようなメジャーなものから、中東のイメージとは全く異なる商品までそろっていて、大変驚きました。中でも、特に驚いたのは、ある店の店員が日本語で話しかけてきたことです。自分は日本人だと名乗っていないのに、日本人だと言うことを見抜いて話しかけてきたため、大変驚きました。全体的に、日本の商店街のような活気や、暖かさがあったと思います。近代化が進んでいるカタールでこのように、家庭的で伝統的な店が数多くあるということは、日本と似通った点であると思いました。新スークワキーフでは、伝統的かつ近代的な店が数多くありました。また、ここにも暖かい人々が数多くいました。

三日目
カタール医療センター

ここは、カタールの最先端の医療技術を誇る医療センターで、日本とは異なった技術の数々を目にすることができました。たとえば、乳幼児の手術のシミュレーションができるマネキンです。乳幼児がのどにものを詰まらせたときにどういった対応をすべきかと言うことについて話し合いました。特にすごかったのが、患者の脈拍や血圧などのデータを入力し、実際にオペができるマネキンです。誤った対応をすると、マネキンがしんでしまうといったものです。これにより、正しい対応の仕方を知ることができるということです。ほかにも、正しい包帯の巻き方などについての講習を受けました。これは、万国共通なようで、日本とあまり差はありませんでした。カタールには、カタール人の医者が少なく、他の国の優れた医者の方々を招待しているそうです。さすがカタールだと思いました。

ビラギオモール
ここは、カタールで最大の規模を誇るショッピングモールで、世界中の有名なブランドの店が数多くありました。店の中に川のようなものがあり、日本のショッピングモールよりも、遙かに大きいように思いました。天井が屋外の空のようになっているといったこった内装で、スケールの大きさに驚きました。ビラギオモールには、現地の人だけでなく、いろいろな国の人々が買い物に来ていました。つくりも様々なところに買い物客が買い物しやすいように工夫が施されていました。
店の中に噴水があったり、お祈りするための部屋などがあったため、日本のショッピングモールとは、かなり違った印象を持ちました。もっとたくさん時間があれば、さらにこの店を散策してみたいと思いました。

四日目
アスパイアアカデミー
ここは、オリンピックに出場するための選手を育成する専門学校で、小学生から高校生までが、この学校独自のカリキュラムで練習しています。僕たちが訪れたときは、ちょうど体操競技の練習をしていて、それらの様子を見せていただきました。他にも、屋内プールや、屋内のサッカーグラウンド、卓球場、柔道場などがあり、世界最大の屋内競技場だそうです。同じ建物の中に寮のようなものがあり、生

徒達はそこで寝泊まりするそうです。日本では、「同じ釜の飯を食う」という言葉がありますが、そうすることにより、互いの絆や競争心が徐々に高まっていくのだと思いました。そこで僕たちも昼食を食べました。野菜中心のメニューが多く、健康に注意している様子が伝わってきました。また、そこには、日本人のサッカーのコーチがいました。これも、優れた人材を世界中から集めているからです。

KATARA

ここは、元首長が理事長を務める文化村です。ここには、日本料理のレストランや、喫茶店、博物館や、美術館などが数多くありました。また、それらの博物館や美術館はすべて入場料や絵はがきなどが無料で、ここでもさすがカタールだとおもいました。コロッセオをモデルとした大理石でできた闘技場もありました。僕たちはここで美術館や博物館などに入りました。切手や絵画などが飾られていました。ここには、モスクもあり、たくさんの観光客が世界中から訪れるそうです。ここもカタールの伝統的な場所の一つで、大変趣があるため、これからも後世へ残していくべきだと思いました。今回は残念ながら理事長である元首長には会えませんでした。

パールカタール

ここは、近年建設が始まった人工島で、たくさんの高級レストランや高級ホテルなどがありました。僕たちが泊まる予定だったインターコンチネンタルドーハもこの人工島にありました。また、この人工島には、たくさんの船が留めてありました。カタールの人々は、休みになると、親族を誘ってこれらの船でヨーロッパ方面へクルージングに行くと聞き、大変驚きました。居住者容量は約３５０００人でドーハの新しい顔として期待されています。

ここにも、日本料理のレストランが数多くあり、いかに日本食が世界的に人気があるのかということが分かりました。時間の都合上、あまり散策をすることができませんでしたが、これからのカタール観光の目玉となっていくだろうと思いました。また機会があれば、行きたいと思いました。

五日目

ラスアブフォンタス発電所

この発電所はカタールでも最大規模の、火力発電所です。火力発電には水が必要ですが、降水量が非常に少ないカタールでは、どのようにして水を供給しているのでしょうか？カタールには、海水を真水にする技術があるそうで、海水から変えた水を発電に用いるそうです。また、生活用水にもこのような水が用いられているため、カタールの水道水は、海外では珍しいことに飲むことができます。学校にも掲げられていた首長と元首長の肖像画が、この発電所にも掲げられていました。この発電所はカタールでもかなり進んだ発電所ということでしたが、仕組みや効率などは日本と同程度、もしくはそれ以下だと思いました。操縦室からボイラールームまで見せていただいたため、仕組みがよく分かり、非常によい経験となりました。

生徒宅訪問

　アルワクラ高校の生徒宅にて、カタールの家庭料理を体験しました。この家庭は、カタールではごく一般的な家庭だと聞きましたが、それでも、応接室だけで一つの家屋であったり、車が６台もあり、それがすべて高級車であったりしました。また、驚いたことに、ビリヤード専用の小屋もあり、非常に豊かな生活を送っていると言うことが分かりました。さらに、週一回は親族などで集まり、パーティーのようなことをするとも聞きました。その裕福なことに驚くとともに、親族同士のつながりを大切にしていると言うことに感銘を受けました。

　他にも、家にはそれぞれ召し使いがいて、掃除や洗濯などの家事もその人達がするそうです。日本の一般的な家庭では、そういったこと考えられないと思いました。

六日目

カタール文科省訪問

　カタールの文科省に訪問し、文部大臣と対談しました。文部大臣は僕たちに、カタールの印象（カタールへ来るまえの日本でのカタールの印象とカタールでイスラム文化を体験した後のカタールに対する印象）や、カタールでどこが一番印象に残っているかなどをお聞きになりました。前の晩に準備していたこともあり、何とか失礼のない受け答えができたのではないかと思いました。また、カタールの文科省のビルは非常に立派で、日本との差を思い知りました。やはり、現在発展中のカタールだからこそだと思いました。カタールは、これからも急速に発展していくだろうとぼくは思いました。しかし、その発展も石油や天然ガスなどの化石燃料があってこそ。石油が枯渇するまでに世界でも評価されるような技術を確立させようとしているカタールは、とてもすばらしい国だとぼくは思いました。またの機会があれば、ぜひ訪れたいと思っています。

最終日

　日本に帰ってくると、やはり日本のほうが落ち着くと思いました。今回の研修は、ふつうの田舎の高校生ができるものではないと思います。今回の研修は、ぼくに自信と、前向きに行動することの大切さを教えてくれました。この研修によって、この研修に行く前の内気な性格を少しは変えられたのではないかと思っています。この研修を糧に、国際交流（たとえばフォーラム）にしろ、その他のことにしろ、自分に自信を持って積極的に行動したいと思っています。

２　マレーシア　スリアマン校主催　Environmental Youth Leadership Summit 参加　【4 月 18 日～24 日】

スリアマン校は、以前から教育旅行で日高高校を訪問し、『アジア高校生フォーラム』にも参加した学校です。環境教育に力を入れ、毎年このサミットを開催し、アジア各国から多くの参加者を集めています。今回、スリアマン校からの招待をうけ、生徒３名（2 年 2 名、3 年 1 名）が参加しました。

マレーシア研修

2－6　桶谷弥生

ムービー作成

Saeyls2015 で放映するエコ動画を作るため、2 月から動画の構成を考え始めました。動画の内容は、学校紹介と学校で行っているエコ活動を含むものと規定があり、私達は日高高校 100 周年記念に作られたマグカップを題材にする事に決めました。自動販売機でペットボトルを買い、そこから記念マグカップが出来るまでの過程を、動画編集の得意な 3 年生の 2 人に手伝ってもらいながら作成しました。回収されたペットボトルはゴミ収集所に集められ、洗浄、プレスなど様々な過程を通り、プレート状の小さなプラスチックに変身！そして、大洋科学で加工された後、マグカップとして私達の手元に返ってくるのです。中々入れない大洋化学のプラスチックの加工現場を近くで見学させてもらえた事は、良い経験になったと思います。動画内のセリフは片言になってしまった所も多いですが、いろんな意味で記憶にも記録にも残る動画が完成したのではないでしょうか。

1 日目

朝、関西国際空港に着くと前教頭先生が見送りに来てくださって、英語に関する話や国際理解など色々な話をしてくださいました。約 7 時間のフライトを終え、現地時間午後 7 時頃にクアラルンプール空港に到着すると、スリアマンの学生が出迎えてくました。あぁとうとうマレーシアに来たんだなと、嬉しさと不安で胸がいっぱいでした。バスに乗り込み、マレーシアの街を見ていると、同じ形の家が何百も並んでいる住宅街があったり、高速道路がかなり幅広かったりと、初めて来た国ではありますが、新鮮さとどこか懐かしさを感じました。SAEYLS の会場となるホテルに到着すると、歓迎パーティーが始まっていたらしく、私達も遅れて参加しました。私は、フォーラムで私の家にホームステイをしてくれた友達に半年ぶりに再会する事が出来ました。困った事があったら言ってねと声をかけてくれ、

優しいお姉さん達がいて本当に良かったと心のそこから思いました。SAEYLS には、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン、日本の十数校、40 人ほどが参加していました。歓迎パーティーでは、みんなでゲームをし、仲を深めることが出来ました。しかし、周りの学生の英語の流暢さは圧倒的で、また、先輩と部屋が離れてしまった事も心の打撃となり、重い気持ちで 1 日目を終えました。

2 日目

朝から Bakaugruv へ出発し、マングローブ林で清掃活動を行いました。マングローブ林の泥の道を歩きながら、ゴミを拾いました。泥の異臭と、歩きにくさには戸惑いました。マングローブ林を抜けると、海が見えてきました。海の水が茶色だったのは、衝撃的で、新鮮でした。そこでマレーシアの海にいる生物の観察をし、みんなで泥の投げつけ合いをしました。臭くてたまりませんでしたが、泥まみれになりながら遊んだのは楽しかったです。また、強い日差しに日本とマレーシアの気候の違いを実感しました。それから、ホテルに戻り、泥を流し落とした後、各学校のエコ活動を紹介する発表会に参加しました。どの学校もエコ活動を真剣に取り組んでいる学校が多く、プレゼンを聞いていて、自分の学校でも実践してみたいと思う事例がいくつもありました。自分達も用意していたプレゼンを発表し、この日は終わりました。

3 日目

この日は、主催校であるスリアマン高校へ行ってきました。まず歓迎式に参加し、スリアマン高校の生徒が合唱やオーケストラ、ダンスを披露してくれました。普通のクラブ活動とは思えないほど人数も多く、大迫力でした。その後、学校内を見学させてもらいました。雨水をろ過し、生活用水として使う機会や太陽光発電など環境を意識した設備が至る所に見てとる事が出来ました。さすがマレーシアの学校環境賞(ちゃんとした名前は忘れました…)を受賞する学校だと感じました。日高も見習って、もっと環境を意識した活動や設備を増やすべきだとなのではないかと思います。当日は、科学実験の展示もあり、健康診断やマレーシアの伝統工芸品であるバチック体験の体験をしました。学校見学をした後は、Saeyls に参加している生徒全員で輪になりながら、ゲームをしました。その時にいろんな人と話ができ、ゲームも楽しくて、少しだけ心に余裕が生まれた気がします。みんなでゲームをしている時は有意義で、スリアマンの穏やかな雰囲気も私は気に入りました。

午後からは自発的危機挑戦(Spontaneous Crisis Challenge)に参加しました。この活動が、マレーシア

研修の中で 1 番難しく、苦労した課題でした。自発的危機挑戦とは、与えられた時間の中で渡された紙に書かれた問題の解決策を考え、ポスターにまとめ、発表するというものです。まず、Stage1 では、ある島で洪水が起こり、被害者の救出、医療、電力復旧など 6 つの項目を解決するプランを考えよ、というお題でした。私達は東日本大震災を例にならって解決策を提案すると、なんと Stage2 に進みました。全く予想していなかったので、これには本当に驚きました。Stage2 もある島の問題を解決する課題をもらい、疲れながら、なんとか解決策を考えて発表しました。残念ながら受賞は出来ませんでしたが、ためになる経験でした。この日は、疲労と良い経験を出来たという満足感を感じつつ、布団に入りました。

4 日目～

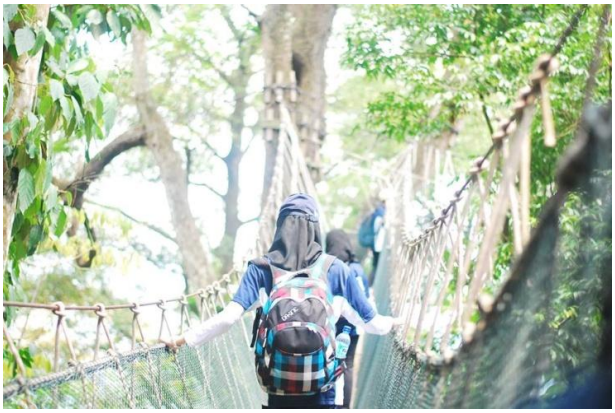
３－６　柏木　小遙

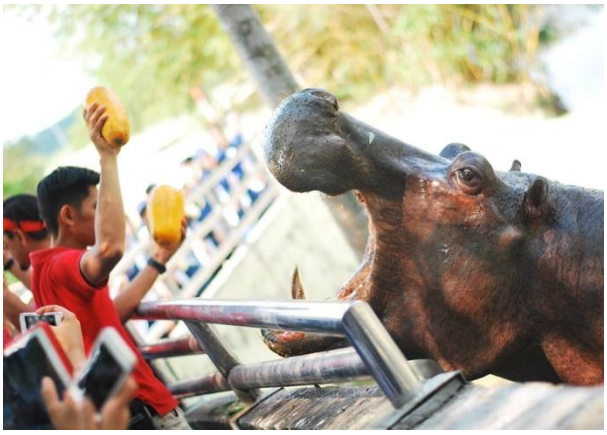
4 日目はバスで Paya Indah Weatlands に行き、そこでスコップ、軍手などを渡され、まずは二人一組で植樹をしました。SAEYLS の恒例行事の一つのようで、そこでは昨年度の参加者が植えた木も見ることができます。その後、Weatlands での昼食に向かう道中で、ワニやカバを間近で見ることができました。カバに関しては実際にパパイヤの餌やり体験をする参加者もいました。

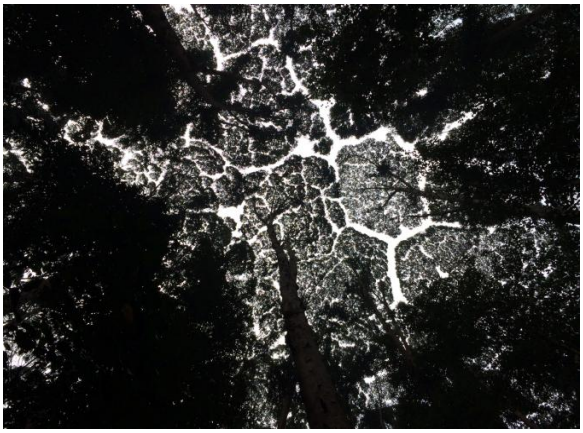
昼食後、またバスで移動して Forest Reserve に到着しました。4 班に分かれ、ガイドさんが各班に付き、山登りが始まりました。登山道が途中で険しいものに切り替わり、その辺りでリタイアする参加者もいました。それに加え、その森は Reinforest だそうで、傘もカッパも持たないままで 20 分ほどの土砂降りに遭いましたが、それでも私たちは最後まで登り切りました。その最後には Forest Reserve の名物である吊橋渡り、Canopy Walk に挑戦しました。予定を見たときからワクワクしていましたが、実際に体験してみると、思った以上に高さのある場所でした。しかし雨の後というのもあり、森が霞みがかって凄く神秘的な体験になったと思います。そこから下山して、ガイドのお兄

さんが横道に逸れ、また森に入っていこうとしました。彼は「ここから先は『ヒル』が出るから気を付けて！」と、『ヒル』という日本語を混ぜて説明してくれました。その先のある地点で、お兄さんの言う通りに空を見上げるとみると、木のすごく高い位置についている葉が太陽の光で逆光になり、凄く綺麗な景色を作っていました。この光景はマレーシアではその場所とインドネシアで見ることができるそうです。

　そしてホテルに戻り、夕食後に Dialogue Session が始まりました。日本で予定を見ている時に理解できなかったプログラムの一つでしたが、いざ始まってみると講演会であることがわかりました。その日の講師は女性で、もちろんオール英語で環境についての講演だったので専門用語が飛び交い、ほとんど理解できませんでした。極め付けはその終わりに「近くの人とグループになってこれらのことについて討論をし、プランを作りポスターにし、そのプランについて 1 分以内で説明しなさい。」という、私たちには難易度が高すぎるものでしたが、後ろに座っていたスリアマン生二人とインドネシアの女の子が一緒にやらない？と声をかけてくれ、三ヶ国合同チームでほとんど助けてもらいながらなんとかプランをたて、発表することができました。







5 日目

5 日目は早起きをして、バスで郊外にある Kuala Gandah Elephant Sanctuary に向かいました。現地に到着して、まずは屋内に通され、象に関するビデオの鑑賞をしました。そこから班に分かれて、ガイド付きで象の見学をしました。間近で象を見ることができ、実際に餌を買って餌やり体験もしました。ガイドのお兄さんは最初、英語で案内してくれていたのですが、中盤になるとマレー語で説明し始め、理解できない私たちに SAEYLS のメンバーが英訳して説明してくたのがすごく印象に残っています。その後の昼食では、仲良くなった参加者と将来の夢の話などをして、昼食後には大勢でサイレントキラーで遊び、とっても盛り上がりました。その後はホテルに戻って、この日も Dialogue Session があり、講演を二つ聞きました。どちらの講師の方もわかりやすい英語で、前日で感覚がわかったのもあり、前日よりも理解することができました。

私は東南アジアの国々の雰囲気が大好きで、この募集がかかったときから絶対に行くぞ！と意気込んで申し込みました。無事に選考に通り、ついに現地に到着し、SAEYLS の委員のスリアマン生徒が空港で温かく迎えてくれました。しかしホテルに着いてみると、言われた部屋には弥生ちゃんではない二人の外国人生徒の名前がありました。寝るときはさすがに学校ごとで男女に分けるのだろうと勝手に思い込んで行ったので、不安がまた生じ、初めて海外に行って早く日本に帰りたいと思いました。その日はご飯も喉が通らなくて、でもどうしようもないので、渋々部屋に入りました。

私のルームメイトは Grace と Gheby というインドネシアからの参加者でした。私は一人眠れぬ夜を過ごしたのを今でも鮮明に覚えています。

日本にいた時に、「最初の三日間はキツイかな？でもそれを乗り越えれば大丈夫！！」と予想して行ったので、そんなこんなで前半は本当に「仕方なく」という感覚で行動していました。ただ、いろいろな活動に不安を覚えながらもこなしていく中で、参加者みんなが本当に気さくに接してくれるのです。すれ違うたびに Hi~と笑顔で声をかけてくれたり、名前を呼んでくれたり、英語で話している輪に入れずに戸惑っているとすぐに話しかけてくれたりしてくれ、私も必死でそれに答えるようにしていました。そうしていると最初に感じていた「知らない外国の人」という意識が消えて、自分から「あの子と話してみたいな」と思うようになり、気づけば軽い冗談交じりで話もできるようになっていました。こんなに劇的に心情の変化で行動ができるようになることって本当にあるんだなと自分でもびっくりしています。

それぞれの活動や発表等を通しての感想は山ほどありますが、個人的な思い出は「ムスリムと一緒に過ごしたこと」と「日本のブランド感」と「ヒルに噛まれたこと」です。

まず一つ目の「ムスリムと一緒に過ごしたこと」は私に、知っているようで知らない異文化を強く感じさせる経験になりました。 SAEYLS にはたくさんのムスリムが参加していて、Gheby もムスリムの一人した。彼女が部屋で衣装をまとい、ある方向に向かって礼拝をしている光景をよく目にしました。他にも現地でのご飯は肉は鳥のみだとか、トイレに紙がないところがあるだとか、日本との違いをムスリムと過ごして痛感しました。

そして「日本のブランド感」については、まず「日本から来た」というだけでみんなが私たちに興味を示してくれました。「日本語でこれはなんていうの？」「あのアニメすごく好き！」などという話で何分も話すことがありました。そんななかで一人、Delisya という、インドネシアの女の子が大の日本好きということで私たちと良くしてくれました。彼女は学校で日本語の部活をしているといい、とっても流暢な日本語でコミュニケーションを図ってくれました。彼女は今でも頻繁にやり取りしている SAEYLS メンバーの一人です。いつか日高に来てくれたらいいなあと思っています。

最後に「ヒルに噛まれたこと」ですが、5 日目の Forest Reserve でガイドのお兄さんが注意してくれたにもかかわらず、ホテルに帰って足を見ると血だらけで失神しそうになりました。でもそれのお陰で、ルームメイトが絆創膏を貼ってくれたり、噂を聞いたメンバーが翌日声をかけてくれたりで、人の温かみを感じることができたので良かったかなと思っています。

今思い返すと、いろいろなことを体験したなあと思うと同時に、もっとあれをしておけばよかった、ということもあります。でも現在は文明の機器のおかげで参加者ほぼ全員とやりとりすることができます。彼らとの繋がりを大切にして、今後のあらゆる場面に役出てればいいな、と思っています。

6日目～帰国

２－３　中嶋　頌磨

６日目は午前中に閉会式がありました。閉会式では各国の伝統衣装をきて参加しました。各学校はそれぞれ伝統的なダンスを披露しました。僕たちは横笛で演奏をし、盛り上がってもらえました。他の学校のダンスはやはり外国ということもあって独特でした。どの学校のダンスもとてもよかったです。その後一週間の活動を通したムービーが流れました。時間がない中でとても素晴らしい作品を作ってくれました。この後料理を食べながら話をしたり、写真を撮ったりしました。また、集合写真の裏にみんな一言を書きあっていました。他にも各学校のお土産をもらったりもしました。昼食を食べた後は KLCC（ツインタワー）に行って、中にある科学関係の小さなアトラクションがたくさんあるところで遊びました。そのあとはツインタワー内にあるお店に行きました。書店には日本の漫画が英語で売ってありました。日本で人気の漫画は海外でも人気でした。この後は夕食を食べ、ツインタワーの裏にある噴水の回りを散歩しました。集合時間になり次にセントラルマーケットへ行きました。ここにはアジアンなお土産がたくさん売っていました。伝統衣装をはじめお菓子や置物などいろんなものがありました。この日でみんなと過ごすのが最後だったので寂しかったです。

七日目は自分たちでパビリオンに行きました。ここは日本のデパートと変わらないお店がたくさんありました。とても広くお店がたくさんありました。この後に昨日と同じセントラルマーケットに行きました。昨日来ていたのでどこになにがあるのかわかっていたので楽に買い物ができました。この日は早めにホテルに戻って寝ました。

八日目はいろんなところへ行きました。最初に王宮に行きました。ここでは衛兵の方と写真を撮りました。王宮は白を基調としたきれいなものでした。そのあとイギリスからの独立を宣言した広場へ行きました。過去にこの国でも戦争があったということを改めて思いました。この後は実際に使われているモスクへ行きました。中に入るときは裸足で女性は肌を隠さないといけませんでした。そのあとパティックというマレーシアの伝統的な染物のお店に行きました。パティックとはロウが水をはじく性質をうまく利用したものです。昼食後はパトゥー洞窟というヒンドゥー教の聖地に行きました。ここは階段が２７２段あり頂上は洞窟になっています。サルがたくさんいて階段の横には大きな金色の像があります。この後に「ロイヤルセランゴール」という鈴工場に行きました。この工場は世界的にも有名で長い歴史があることを説明してもらいました。この後チョコレートのお店に行っていろんな種類のチョコレートの試食や紅茶、コーヒーの試飲をさせてもらいました。
この後はパビリオンに行きました。昨日も行っていたのであまりすることがなかったです。夕食で最後のマレーシア料理を味わい空港へ向かいました。

長いようで短い一週間でした。多くのことを学べ、知ることができとてもいい経験になったと思います。

３　中国大連第16中学訪問　姉妹校提携を締結【5月23日～27日】

昨年のアジアフォーラム（2014年10月14日～17日）を契機に大連市から姉妹校のお話をいただき、生徒会 稲葉真実 黒祖友夏 丸井瑞穂　の3名と箏曲部 山﨑美緒 保田穂香 赤松亜優美 荒井梨菜の、計7名で5月23日から27日にかけて、二階俊博さん率いる日中観光文化交流団のツアーに参加し北京、大連を訪問しました。

＊日目	月日	スケジュール
1日目	5月23日（土）	14:30　日本大使館（見学） 18:30　人民大会堂にて 「日中文化観光交流の夕べ」（出席）
2日目	5月24日（日）	早朝　故宮（散策） 17:00　アカシア祭開幕式（出席） 18:30　歓迎レセプション（出席）
3日目	5月25日（月）	8:30　大連第十六中学校姉妹校調印式 15:30　東北財経大学講演会（出席） 18:00　答礼会（生徒会が出席） 19:00　ジャパンデー（箏曲部による演奏） 20:00　京劇鑑賞
4日目	5月26日（火）	8:50　大連第十六中学校との学校交流 13:00　大連領事事務所（訪問） 14:10　大連日本人学校訪問
5日目	5月27日（水）	午前　大連市内観光 →帰国

5日間の中で3つの項目をピックアップし、みなさんに紹介したいと思います。

（1）北京

中国の首都・北京は華北に位置し、秋田県とほぼ同緯度で、日本から約3時間30分で行くことができるとても近い都市です。北京には人民大会堂と呼ばれる建物があります。皆さんも一度は見たことがある天安門のすぐ近くにあり、会議や外国使節の接受の場として使われています。ここで開かれた、私た

ち訪中団を歓迎した式典には現国家主席である習近平氏が登場し、歓迎スピーチをしてくださいました。「生で習近平さんのスピーチを聞くことが出来た日本人高校生は私たちが初めてだったのではないか」と、後から校長先生がおっしゃっていました。本当に貴重な体験ができました。

また、中国伝統文化の京劇や伝統楽器の演奏で私たちのために式典のオープニングを飾っていただきました。京劇は北京を中心とする伝統的な演劇で、100 を超す地方演劇の頂点にあり約 200 年の歴史を持っています。言葉と音楽と舞踊を融合させた演劇です。

2 日目の朝、特別に開園前の紫禁城を散策させてもらいました。紫禁城は明、清朝の旧王宮である歴史的建造物です。別称「故宮」と呼ばれることもありますが、「古い宮殿」という意味で呼ばれます。清朝第 12 代の最後の皇帝「愛新覚羅溥儀」が暮らしていた宮殿として知っている方も多いと思います。

（２）大連第十六中学校姉妹校

大連第十六中学校は中学校と言う名前ですが、日高高校と同じように中高一貫の学校です。中国では総称して「中学校」と用いられています。

3 日目の調印式には二階さんをはじめ日高高校出身の方たちにもご出席いただきました。両校の校長先生の調印が終わった後、生徒同士の調印も行い日高高校は前生徒会長の稲葉真実が調印を行いました。調印式の後は両校楽器の演奏を行い、私たちは箏曲部の 4 人で「さらし風手事」・「もののけ姫」を演奏しました。

4 日目の交流の日、私たちは高校 1 年生の「日本語」・「英語」・「体育」の 3 つの授業に参加しました。1 日の授業数は日本よりも多いですが授業開始時刻が早く、1 限が 50 分ではなく 45 分授業でした。また、どのクラスも黒板の半分がスクリーンになっていてプロジェクターを活用して授業を行っていました。

日本語授業は聞き取り問題や長文の問題をしていました。

また、日本語と英語の授業の間に「体操の時間」という時間がありました。この時間は体育の授業とは別で毎日あるそうです。中国では大体どの学校にも毎日時間をとって体操をしています。この日は 1 学年のみでしたが普段は全校生徒でするそうです。

英語の授業は All English で「板書」ではなく「聴く・話す」という授業でした。この日はあいさつやジェスチャーを使って自分の感情を伝えるという内容でした。

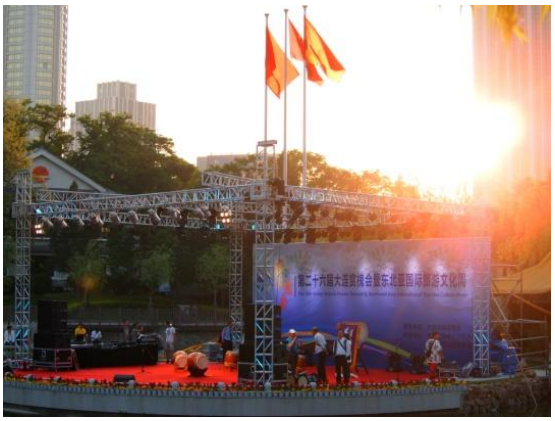
最後は体育の授業です。生徒会の 3 人はバレーボールをし、箏曲部の 4 人は見学・隣でバスケットボールをしていました。途中で先生から自己紹介を頼まれ、以前から練習していた中国語で自己紹介をしました。その後学校内を見学し、一緒に授業を受けた子たちと写真を撮ったり、連絡先を交換しました。

（3）箏曲部

箏曲部は「大連第１６中学校」「アカシア祭・ジャパンデー」「大連日本人学校」で、演奏させていただきました。

「大連第１６中学校」では調印式の後、大連中学校の皆さんや日高高校ＯＢの諸先輩方の目の前で演奏しました。

「ジャパンデー」では度重なる予定変更に、不安な気持ちが大きくなっていきましたが、屋外ステージで、夕方７時の演奏開始時間には大勢のお客様にお越しいただき、幻想的な照明の中で演奏することができました。お客様は皆カメラを向けてくれ、お琴に少しでも興味を持ってくれたのではないかと思います。海外の人に、少しでも日本の伝統文化を知ってもらえたことが、私たち箏曲部にとって一つの大きな収穫だったと思います。



（総括）

私たちは中国へ行く前と行った後で、中国に対する見方が大きく変わりました。それは「町・道路・建物・人」すべてに対してです。首都北京では木が多く、何車線もある道路がきれいに整備されていました。人民大会堂の大きさは日本人の感覚では表現できないほどスケールが大きいものでした。そして、「人」です。中国に行く前は、中国の人は早口で気が強そうな印象がありましたが、実際ふれあってみると、ゆっくり丁寧に案内してくれたり、笑顔で話しかけてくれたりと、優しく好意的に接してくれる人が多かったです。一部の情報だけですべてを理解した気になるのではなく、自分の目で確かめ、自分自身で考えて物事を見ていきたいと思いました。この 5 日間の経験がなければ、今も中国に対してマイナスなイメージを持っていたかもしれません。テレビや新聞で報道されている内容は、情報の受取り側である私たちに良い印象を与えるものはごくわずかだと思います。そんな中、中国へ行き感じたこと、知ったことによって自分の考えが大きく変化したこと、みんなに中国という国をもっと知ってもらいたいと思ったこと、もう一度中国へ行きたいと思っていることが一番の収穫だと思います。

また、大連第十六中学校での授業参加と交流を通して自分たちの授業に対する意識が変わりました。

私たちの授業とは対照的に、どの授業でもみんな積極的で自分から進んで発言をしていました。そこから感じたことは「競争心」です。「人よりも一歩先を行きたい」そういう風に感じました。もっと成長したいその気持ちを忘れずにこれからの授業に取り組もうと思いました。

今回私たちの訪中の目的は大連第十六中学校との姉妹校締結でしたが、たくさんの方のおかげで数えきれないほどの貴重な体験をすることができました。そしてそれらの体験のほとんどが私たちだけの力では成し得ないものでした。

5 日間数えきれないほどたくさんの人に出会いました。特に全くの見ず知らずの日本の方や中国の方が、「私たちが日本の高校生」というだけで興味を持ってくれたりして話しかけてくれたことがとても嬉しかったです。ほんの一瞬の出来事で小さな事かもしれませんが、自分の輪が広がったような気がします。改めて人と人との関わりが私たちに大きな影響を与えてくれるものだと感じ、もっともっと大切にしていこうと思います。

また先月 26 日には御坊市民文化会館にて大連報告会に出席させていただきました。箏曲部はオープニングとして箏曲を披露し、15 分という短く貴重な時間をいただき私たちなりにまとめて報告しました。このような機会をいただいたことに感謝しこれをバネに成長していこうと思います。今回の発表や展示によって、隣の国である中国に対して興味・関心が一つでも増え、魅力が伝わればと思います。

４　姉妹校　中国　西安中訪問　【10 月 17 日～10 月 22 日】

日高高校の姉妹校の一つ、中国西安中に訪問団を送りました。日高高校から 5 回目の訪問です。今回は附属中学 3 年生が 3 名、高校 1 年生 2 名、2 年生 4 名の計 9 名が訪問しました。今年は西安中学創立 110 周年記念にあたっており、訪問団は日高高校を代表して記念式典に出席しました。

１日目～２日目

附属中３－Ａ　中井　充歩

経由地点の青島空港に着くと、埃っぽい空気や周りの人々の話す聞き慣れない言葉で、「もう中国にいるのか」と私は思いました。次に乗った青島から西安に向かう飛行機の中で、ようやく緊張や不安が湧いてきました。

西安空港に着いて、すぐトイレに行くと、出発前に聞いたとおり、トイレットペーパーは設置されていません。また、トイレットペーパーは備え付けのゴミ箱に入れるようになっていました。日本ではありえない光景に、早くも衝撃を受けました。

手続きを済ませて空港を出ると、私たちのホームステイ先の方々が温かく出迎えてくれました。

私のホストシスターは、樹楠という名前で、17 歳。彼女の両親は英語を話せません。それを聞いて、私は不安になりましたが、樹楠が通訳してくれたので、安心して話すことが出来ました。

空港からステイ先の家に向かう車窓からの西安の街並みは想像以上にスケールが大きく、圧倒されました。道路は 6 車線以上あるにも関わらず、車が渋滞。信号を守っている歩行者も少なく、交

通マナーの悪さが伺えました。

家に着いてすぐに出掛けました。鞄を持って行こうとすると「財布は持たないで」と言われました。中国ではもてなす側が客にかかるお金を全て負担するという文化があるそうで、そのことを初めて知った私は、とても驚きました。

次に、夕食を食べに行きました。そこには天倉先輩とそのホームステイ先のご家族もいました。普段日本で食べている中華料理とはメニューも味も違い、口に合う料理ばかりではありませんでした。また、お箸の先は細くなっておらず、不思議に思って尋ねてみると、西安は内陸に位置しているため、日本のように魚を頻繁に食べないからなのだそうです。食事をするだけでも文化の違いを感じられて、おもしろかったです。

夕食を食べた後は、私と樹楠、天倉先輩、先輩のホストシスターでショッピングモールに行きました。そこには、無印良品やユニクロなど、日本のお店がありました。樹楠は、「私は無印良品の文房具をよく買うよ」と言っていて、なんだか嬉しくなりました。

ショッピングモールを一通り見て回ったあと、歩いて家に帰りました。家に帰る途中、樹楠は西安の歴史や学校のことなど、たくさん話をしてくれました。特に印象に残ったのは、「西安の道には名前がついていて、その名前や由来を知れば中国の昔の歴史を理解できる」という話です。自分の街や歴史についての知識があり、それを外国人に説明できるということはすごいことだと思いました。

こうして、１日目を無事に終えることができました。

２日目は、午前中に西安中学 110 周年記念式典に出席し、午後からは観光に行きました。

朝に西安中学へ登校したとき、そのあまりのスケールに驚愕しました。建物の大きさだけでなく、人の多さ、また、グラウンドの設備など、日高高校とは比べものになりません。全校生徒は約 4000 人以上もいるそうです。

式典が始まる前、樹楠のクラスメイトと話しました。音楽の話をしました。私は洋楽をよく聞くので、知っているアーティスト名を言うと、「I like them too!」と言われ、話が弾みました。音楽は本当に国境を越えるのだ、と学んだ瞬間でした。

その後の式典では、西安中学の式典と、空軍航空学校の式典が一緒に行われました。また、西安中学で生徒全員が軍事訓練を受けるのも、そのためだそうです。また、式典で西安中学出身の歌手が歌を歌ったりしていて、言葉が分からない私達も、楽しむことが出来ました。本当に素晴らしい式典でした。

午後からは、式典の前に話した樹楠のクラスメイト２人と、辻先輩、天倉先輩、私、そして私達のホストシスターで観光に行きました。

まず初めに向かったのは「大雁塔」です。大雁塔では、地下水を汲み上げているそうで、その勢いで少し傾いているそうです。またその麓には大規模の噴水があり、夜はライトアップされるそうです。また、塔の麓で風船を飛ばし、塔の高さまで上がっていけば願いが叶うという都市伝説があ

り、私、天倉先輩、辻先輩の３人で挑戦しました。しかし途中で風に飛ばされてしまい、風船は上に上がりませんでした。

次に、屋台がいっぱい建っている通りに行きました。大勢の人であふれていて、まるで歩行者天国のようでした。そこで特に印象に残っているのは、店先で飴を伸ばしている職人の方が、伸ばしている飴をちぎって、私にくれたことです。「謝謝」と言うと、とても喜んでくれました。中国の人は見かけによらず、優しいのだと感じました。

夕飯は、みんなで小籠包を食べました。その小籠包はとてもおいしく、ほっぺたが落ちそうでした。「ハオチー（おいしい)」と言うと、とても喜んでくれました。私も、自分の中国語が通じたことがとても嬉しかったです。

家に帰る途中、道端にお金を恵んでもらっている人がいました。それまでは、そのような中国の暗い一面を見ることがなかったので、ショックを受けました。豊かな暮らしをしている人もいれば、貧しい暮らしをしている人もいるという現実を目の当たりにしました。

こうして、２日目が終わりました。

3 日目

附属中３－B　南　日菜

３日目は、西安中学校の授業を体験しました。日本と比べ、学校が始まる時間が早く、七時半くらいには殆どの生徒が教室に揃っていました。それ故か、朝食をとらないまま家を出て、学校に着いてからパンなどを食べるのが一般的らしく、私もそうでした。パンの味は日本とあまり変わらず、少し安心したことを覚えています。また、飲食をしながら授業を受けている方がいることが印象的で、日本との文化の違いを感じました。クラスによって違うらしいのですが、私がお世話になったクラスの授業は、すべて英語で行われていました。どの先生も英語で話され、生徒が問いに答えるときも必ず英語だったので、私は強い衝撃を受けました。中国の学校は、日本より英語の教育に力を入れているようで、授業中で使われる英語はとても難しく、内容をすべて理解することができず悔しく思いました。西安中学校では驚かされるようなことが沢山ありましたが、中でも驚いたのが、そのクラスに在籍する多くの生徒が、イングリッシュネームを持っていたことです。私のホストファミリーの方も Iris という名前を持っており、自己紹介のときイングリッシュネームを持っていないことを伝えると、少し驚かれた様子でした。これは中国の文化の一つであり、グローバル化が進んでいる証でもあるのだと思います。確かに中国での名前を教えていただくより、イングリッシュネームの方が発音し易く、覚えやすかったので、私たち日本人が外国人と交流するにあたっても便利なのではないでしょうか。休み時間ではクラスの方が話しかけてくださったりして、とてもうれしく感じました。日本語を話せる方や、日本の商品を見せてくださる方もいました。二時限の授業を受けたあと、西安中学の生徒、アメリカ団とともに綱引きをしました。中国語の掛け声に合わせ、全員一致団結して行ったので、以前よりホストファミリーの方や西安中学校の方々と近くなったよ

うな気がしました。とても楽しかったです。

四日目は西安訪問団全員で学校に集合し、ホストファミリーの方々と別れて、一日中西安を観光して回りました。先ず伺ったのが、歴史博物館です。館内はとても広く、観光客で賑わっていました。展示物については、通訳の王さんが解説してくださったのでとてもわかりやすく、また興味深いものでした。博物館のあとは昼食でした。回るテーブルは初めてだったので、緊張しましたが新鮮に思い、料理もとても美味しかったです。そのとき、中国語で「食べる」という言葉を教えていただきました。昼食後は、かの有名な兵馬俑の観光です。教科書で見たような情景が広がっていて、興奮しました。中国の歴史に触れ、知ることでこの一日に於いての学びが深まったように思いました。兵馬俑を見終えると、夕食でした。昼食のとき教えていただいた中国語を使って、食事をいただきました。名産だという石榴の味が印象に残っています。夕食を終えたころにはもう辺りは暗くなっていて、最後に「長恨歌」を見せていただきました。煌びやかな衣装、少しのずれもない踊り、壮大な物語、圧倒されてしまいました。今まで見たどんな舞台よりも完成度が高く、簡単に言い表せないほど感動しました。明かりが空や水面に映る幻想的な様子は一生忘れられません。長恨歌が終わっても、暫く其れのことをずっと考えてしまうくらい美しかったです。充実した一日でした。

５～６日目

附属中３－Ｂ　松村　愛恵

英語やホストファミリー、西安での生活にも慣れ、私の中で最も心に残った二日間です。まだ帰りたくないというのが正直な気持ちで、とても充実した研修旅行でした。

２１日の午前中は授業を受け、午後からは先輩や同級生、そしてそのホストファミリー達と、昼食や買い物に行きました。昼食では、鍋料理をいただきました。とても美味しかったです。そして、ここでもいくつかの衝撃を受けました。

一番、私が受けた衝撃は、鍋の中に入っていた長ネギを食べて驚かれたことです。「どうしてそんなものを食べるの？」と言われ、日本人は好んで食べている長ネギを食べたことが、少し恥ずかしくなりました。長ネギは、中国では出汁用に使われるだけで、食べる習慣はないそうです。他にも、生姜などがそれに当たるそうです。

そして、鍋の具材につけるタレにも驚きました。初め、出されたタレは辛くなく、日本でも食べたことのある様な味でした。しかし、別の器にとてつもなく辛そうなタレが置かれてありました。ホストファミリーは何の変哲もなく、その辛そうなタレを初めに出されていたタレに入れていました。それに挑戦した先輩は、「少し入れただけでも味はとても変わる。」とおっしゃっていて、想像のできない味だと思いました。

次に、バスに乗って、商店街のような所に連れていってくれました。そこには中国独特の置物や食べ物が売られていました。私達に馴染みがあるものとして、書道の筆や墨汁や模様のついた鏡やくしなどが、挙げられます。ホストファミリーに書道が上手な人がいて、さすが日本の文化の原点となる所だなと感心しました。

屋台や商店街で買い物をしていた中で、気づいたことは、店員と客の距離についてです。品物を見ていると、ホストファミリーと店員が知り合いなのかなと思うほど笑顔で、話が弾んでいて、店

員と客の距離が近いということが分かりました。西安で交流した人たちもとても積極的に話しかけてくれたので、フレンドリーな人が多かった気がします。

それから先輩たちとも別れ、夕食を食べにレストランに行きました。同級生の子と先輩とその人たちのホストファミリーと合流し、計６人で食事をしました。そして中国のゲームなどを教えてもらい、実践しながら交流を深めました。まだまだ帰りたくなくて、眠ると明日はすぐ来るから今日は寝たくないと話し合ったことを昨日のことのように思い出されます。

そのレストランは初日に夕食のために来た所と同じでした。初日は、そこの料理を食べて、慣れない英語で初めて会う年上のホストファミリーと一緒に６日間もやっていけるのだろうか、あと５日もあるなんて長すぎる、と不安でいっぱいでした。だからまさか、最終日にまだ帰りたくないという風になるとは思ってもいませんでした。本当に良い経験となりました。

２２日、帰らなくてはならない日になりました。ホストファミリーとまた会おうと約束をしたり、みんながそれぞれのホストファミリーやお世話になった方と別れの挨拶をしました。中には泣いている先輩もいて、私も涙ぐんでしまいました。

その後のバスや飛行機の中では、それぞれみんながした体験を語り合い、そこでもカルチャーショックを受けました。

私はこの研修旅行に参加できてとてもよかったと感じます。沢山の経験をし、英語にも少し自信が持てました。改めて、英語や人と人とのつながりの大切さを学びました。これからももっと外国の文化に触れてみたいです。

文化の違いから

１－６　下畑　伊織

私は中国でホームステイをして良い体験がたくさんできた。

私のホストファミリーの子は男の子であったが、すごくレディーファーストで荷物を持ってくれたり、ドアを開けてくれたり、日本の現代の男の子では考えられないことをさらっとやっていてすごくびっくりした。しかも、それは私たちがお客様だからというわけではなく、友達の女の子にもそのようにしていて、日本人の男の子にも少しは見習ってほしいと思った。また、買い物に行ったときに、私が知らない間に私へのプレゼントを買ってきてくれたのだ。昨日、私が「書道が好きだ」と言ったら、筆のセットを買ってくれた。中国の人といえば自己中心的なイメージがあったが、ホストファミリーはとても優しく、常に「Are you tired？」と聞いてくれた。中国に対して私は偏見というものを持っていたのだとわかった。

西安に行ってから二日目、西安中学校に行った。まず、学校への交通手段がタクシーで、とてもびっくりした。私の普段の生活で、タクシーに乗ったことなんてなかったので、これが彼らの日常であることを知り、少し羨ましいと思った。西安中学校はとてつもなく広く、大きく、本当に学校なのかと

疑うほどであった。さらに、私のホストファミリーのクラスの教室は壁一面にイラストが描かれていたり、写真を貼っていたり、個々の机には自分の趣味のステッカーがべたべた貼られており、すごく驚いた。日本とはまるで違ってすごく自由で、それは授業でも変わらなかった。日本の授業とは全く違った。皆口々に自分意見を言っていて、とても賑やかであった。また、問題を間違えたり、宿題を忘れたりすると、立たされていた。日本ではありえない状況での授業だったのですごく戸惑った。しかし、日本の生徒たちもこのように授業に積極的にならなければとも思った。皆それぞれ自分の意見を持っていて尊敬した。さらに、中国の子たちはすごく勉強熱心で驚いた。なんと夜の１０時まで学校に残って自主勉強をしているそうなのだ。さらに、土日にも学校があるということで、私たちが行った日が久しぶりの休みで、嬉しいとホストファミリーの子は言っていた。私はとても大変そうだと感じ、なぜそんなにも勉強をするの、していて辛くない、と聞いた。彼は、「辛いけれど、家族のために勉強をして、いい職に就きたい。中国は人が多い分、就職率が激しいんだ」と言っていた。私はこれを聞いて自分の勉強に対する意識の低さを身に染みて感じた。私も親のために、という意識を持たなければいけないと思った。

このように、私はホームステイをし、日本では到底体験できないことを身をもって知れた。やはり国が違えば文化が違う、初めはそれに戸惑ったが、それも一つの面白さなのだと思えた。しかし、国が違えども人と人で、仲良くなれないなんてことは無い。英語という言語を通じて、私たちは友達になれた。今回の思い出は一生忘れないだろう。

西安中学校を訪問して

1-6　辻　明希

私は今回の西安中学訪問を通して、中国人の優しさにふれ、国と国との関係はうまくいっていないとしても、人と人は強い繋がりを持つことができると思えました。

最初、私は緊張しきっていて自分からは何も話すことができませんでした。でも少しずつ話すうちに、間違っても伝えようとする意欲があれば伝わると気づき、積極的に話せるようになりました。ホームファミリーのご両親は英語を話すことができず、直接会話をすることはなかなかできませんでしたが、息子を通して質問をしてくれたり、ジェスチャーで伝えようとしてくれたり、時にはスマホで調べて日本語で話しかけてくれたりしました。一生懸命日本語を喋ってくれているのを見ると本当に嬉しくて、私が来たことを心から歓迎してくれているのだと感じてとても幸せでした。

また、中国人のお客さんをおもてなしする文化はとても印象に残っています。中国では、お客さんにはお金を出させず、その人が買って帰るお土産まですべて支払うという習慣があるらしく、私が「悪いから自分で出す」と言っても、「あなたの幸せを作るのが僕の仕事だから、大丈夫だよ。」と言って、すべてのお金をだしてくれました。西安中学校の生徒の家庭は比較的裕福であることも

関係していると思いますが、中国人の太っ腹なところというか、ジェントルマンなところには感心させられました。

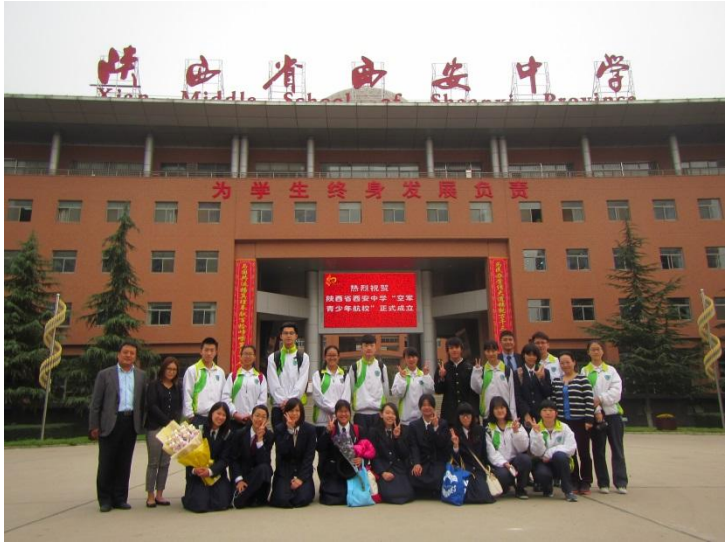
６日間中国で過ごす中で、何度か日中の関係についてどう思うか聞かれることがありました。私が逆に聞き返すと、中国の学生は、「日中の関係は正直よくないと思う。でも、国と国の仲が悪くても、こうして人と人は仲良くなることができる。私は、あなたたちと交流を深めることで、日中の関係改善への架け橋になりたい。」と言ってくれました。私は、本当にその通りだと思いました。私は今回できた中国人の友達のことが本当に好きになっていたし、学校でもとても暖かい歓迎をうけて、中国なんて、という考えは一切無くなっていました。私は、今までは「中国」というだけで偏見をもち過ぎていたことに気づき、これからは、「中国」という国だけを見ずに、「人」を見て関係を深めていきたいと思いました。

今回の西安中学校訪問を通して、本当にたくさんのことを学べました。英語で人と話す力は伸びた自信があるし、中国への偏見を無くすこともできました。温かい歓迎をしてくれたホームファミリーや学校の学生に感謝すると共に、今回学んだことをこれからの生活に活かしていこうと思いました。

日本では教えてくれない中国の姿

２－６　田中　郁也

中国へ行くと決まった時、僕の心の中ではうれしさと不安とが入り混じっていました。その時はむしろ不安の方が大きかったのを覚えています。というのも日本に住んでいる限りどうしても中国で起こる反日活動を目にしたり、いわゆる爆買いというような日本人の常識では考えられないようなことをする人たちが、あまり好ましくないような感じで報道されているからです。



しかし実際に中国に行ってみると、税関の人がかなり無愛想だったということを除けば本当に親切な人たちばかりでした。激しい半日運動とまではいかなくても、なにか暴言のようなものを浴びせられるのではないかと思ったりもしましたがそういったものもあまりなく、むしろ日本のアニメや剣道といった文化に興味のある親日の方が多かったような感じがしました。

僕は以前から中国文化の雰囲気、中華の

盛大で華やかな景色に興味があり、これが今回の研修に参加するもっとも大きな理由でした。そして多くの外国人との触れ合いを経て日本では得られないような経験することを目的としていました。実際この目的は自分の思っていた以上の形で達成することができたと思います。

もっとも印象に残っているのは価値観の違いです。僕は当初中国人と言えども僕達と同じアジア圏に属する国、デンマークほどカルチャーショックはうけないだろうと考えていました。しかし僕はそこで今まで体験したことのないほどのカルチャーショックを体験したのです。まずは衛生面でした。中国に降り立つとそこにはもう空いっぱいの工場からの煙で大気が汚染されていました。映像や写真で見るのと実際に見るのとでは大きく違い、その深刻さに驚きを隠せませんでした。日本では僕達が省エネだ３R だなどと必死に環境保護をしているというのに、そのすぐ隣では環境保護のかの字もないような現実があったのです。しかしすべての中国人が全くこのことに関して無関心であるという事ではありませんでした。中国人のあるホストファミリーの子が「自分は環境保護に携わる仕事につくんだ」と夢を語ってくれました。大人が環境を私利私欲の為に汚していく一方で、子供たちはこの現状をどうにかしようと頑張っている。この事実は中国のこれからの未来が、少なくとも明るい方向へ進んでいくことができるということの裏付けだと僕は感じました。

次に勤勉さです。中国は勉強には非常に熱心な国だという事は聞いたことがありました。しかし現実はぼくの想像をはるかに超えていました。彼らはまず毎日朝八時にグラウンドに出てそこにある 400 メートルトラックを数周走ります。それが終わると急いで教室に行き休む暇もなく授業が始まります。行っている内容は大きくはかわりませんでしたが、違っていたのが生徒たちの積極性でした。生徒たちは先生とまるで会話をしているように学ぶのです。あてられるのが嫌で下を向いている生徒が多い日本からすると、それはまさに理想的な形であり見習うべきところでもあると感じました。

僕は今回の研修を通して中国は非常に興味深い国であるという事がわかりました。中国という国はたとえるなら「大きな大阪」というような感じがしました。というのはこの二つには共通点があり、それは常に自己を大きくして人に接している人が多いという事です。大阪の人はお笑いが盛んという特性からもわかるように、よくノリが良くておもしろいという印象があるように思われます。しかし犯罪発生率が日本一位ということもよく知られている事実であり、これも大阪人の自己を大きくして接するという特性から来たものだと思います。対して中国の人たちも環境への配慮の悪さはよく知られているところですが、僕達日本人を、心をこめておもてなしをしてくれました。道路を走っている車のクラクションの絶え間ない音からその気性の荒さが目立つところもありますが、みんな自己を大きくして接している分心と心の距離が非常に近く、そのぬくもりはとても日本人にまねできない素晴らしいものだと思いました。これが今回の研修で得た日本のマスメディアには伝えてもらえない最も大きな収穫です。

世界から日高高校へ

1　台湾　台北市敦化國民中学訪問団来校　【7 月 10 日】

和歌山県の紹介で、台北市敦化國民中学の皆さん約 80 名（生徒 44 名、教員 3 名、保護者 32 名）が来校しました。敦化國民中学は、音楽活動に大変熱心に取り組んでいる学校で、今回も音楽を通じた交流をということで、歓迎式と交流会を体育館で開催し、高校 1，2 年生と、附属中生徒全員が台湾の民族音楽を鑑賞しました。日高高校からは箏曲部が演奏を披露し、日本の音楽文化に触れてもらうことができました。

2　アメリカ　南カリフォルニア子弟来校　【7 月 15 日】

和歌山県国際交流協会　海外移住者子弟下記生活体験者受入事業で来日した大学生 2 名が来校しました。午前中は高校で英語の授業の授業に参加、中学校では家族の歴史や、自身のアメリカでの生活スタイルを紹介してくれました。午後からは、高校生との交流とプレゼン発表、お互いについての理解を深めました。その後、箏曲部と弓道部の見学と体験を行いました。和歌山にルーツがある方ということもあってか、大変フレンドリーで親しみのわく方々でした。

３　デンマーク姉妹校　フレデリクスハウン高校訪問団来校
【10 月 12 日～16 日】

デンマークの姉妹校フレデリクスハウン高校からの訪問団（9 名）が来校しました。今回で 3 回目の来校となります。訪問団の生徒たちは、授業を一緒に受けたり、交流の原点であるクヌッセン機関長を偲んで美浜町・日高町を訪れたり、地域の文化や歴史を学べる場所を訪れたり、茶道など日本文化に触れたりと日高高校生徒ともに様々な体験をしました。中でも今回は SSH（スーパーサイエンスハイスクール）とコラボし、『生態系サービスを測る』をテーマに日高高校生徒ともに特別授業を行いました。合計 6 時間の講義や実験を通して、科学的な知識とともにお互いの友情も深めることができました。

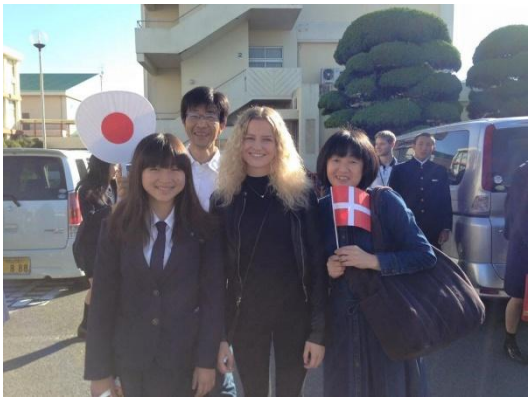
ホームステイを受け入れて

２－６　　出石　美波

私の家にホームステイしたのは、去年ホームステイさせてもらったお家の子でした。Facebook で日本に来ることを聞いたとき、本当に嬉しい気持ちでいっぱいでした。

しかし、待ちに待った１日目は着くのが遅れて夜遅くになり、早く寝たので何もできませんでした。２日目の火曜日は、学校が終わってからみんなでボウリングをしに行きました。この日１日休憩する時間がなかったからか、少し疲れているように感じました。そのあと、食べたいと言っていたお寿司を家族で食べに行きました。デンマークでもよくお寿司を食べに行くらしく、喜んでくれたので良かったです。３日目の水曜日は、帰りに何人かで買い物をして、そのあと家に帰ってきて焼き肉をしました。連れて行ってあげたいところはいっぱいあったけれど、家でゆっくりする時間もあってよかったかなと思います。晩ご飯をたべてから、浴衣を着せてあげると、とても喜んでくれました。木曜日は、森部さん家に行かせてもらってホームパーティーをしました。各家庭で料理を作ってそれを持ち寄りました。最後の夜だったこともあり、とても盛り上がりました。

デンマークの学校は日本の学校よりも終わるのが早く、その分ご飯も夜寝るのも早いので、日本の生活は彼女たちには大変そうでした。私たちの日本での普段の生活を体験してもらえてよかった反面、もう少し時間があったらゆっくり話もできたのにと思うと、少しせわしなく過ぎてしまったかなと思います。しかし、放課後に用意したイベントは盛り上がって楽しんでくれて、試行錯誤して計画してよかったと思えました。自分がお世話になった人だからこそ、楽しんでもらいたいという気持ちも強かったし、自分がホストとなって受け入れることの楽しさを改めて感じました。
こんなに地理的には遠い国同士なのに、一年もたたないうちに再会できるのは本当にすごいことだと思いました。それと同時に、今回が終わると次会うのはいつになるのだろうと思いました。この先は、今回のようにすぐに会うことはできないと思いますが、いつかまたデンマークに会いに行きたいです。



２－５　濵　玲史

デンマークからのホームステイを引き受けて、今までよりも英語が面白いと思うようになりました。

受け入れを決めた時や、初めて対面したときは、緊張や自分の英語が通じるのか不安もありました。受け入れて初めのころは思ったように会話ができず楽しんでもらえるのかという不安ばかりでした。日が経つにつれて次第に話もできるようになり、英語も次第に少しずつ自然に話せるようになってきました。

ホームステイを受け入れて印象に残っているのは、まずたくさんのことを教えたことです。学校についてや、ごはんのこと、日本のことについてなど、いままであたりまえだったことを説明するのはむずかしかったです。ちょうど祭りの季節だったので、日本の祭りについても説明しました。デンマークでのそれとは、大きく違っていて珍しがっていたので練習しているところを一緒に見に行ったりしました。土日までいると祭りを一緒に見に行けたと思うので少し残念でした。

二つ目は一緒に遊んだり、企画してくれたボーリングや、ホームパーティをしたことです。どれもとても楽しかったし、なによりデンマークのひとたちがとても楽しそうだったのでしてよかったなとおもいました。これまでかかわったことのない人たちとも関わる機会が増えました。とくに違う学年の人たちとも接する機会はめったになかったのでとてもいいきかいになりました。

ホームステイを引き受けて初めは心配だったものの最後には別れもさびしく、また呼びたいなと思えるとても自分にとってプラスになることばかりでした。

ホームステイを引き受けて

１－２　嶋田　瑠璃

私はもともと国際理解活動に興味があり、先生に勧められたこともあるので今回のホームステイを引き受けてみようと思いました。ホームステイを引き受けた生徒の中で１年生は私だけだったことと、外国人と触れあう機会が今まで全くなかったことと、文化の違いが分からないことがあり始めは不安ばかりでした。さらに、クリスタが家に来た時も、学校からの帰りの車の中で会話が続かず不安が強くなりました

私には英語で会話を長く続けたり、自分の言いたいことをすべて伝えられるほどの英語の力がないのでコミュニケーションが不安でしたが、伝えたいことを上手く英語にまとめられず焦っていたときは、待っていてくれたし、クリスタの話を理解することが難しかったときは、簡単な英語に言い換えて私が分かるまで何度も説明してくれました。だからとても安心したし、嬉しかったです。家では、それぞれの学校のこと、友人のことなどを話しました。話を聞いてデンマークにもっと興味を持つことができました。他には、家にあった浴衣を着せてあげました。とても気に入ってくれたみたいで嬉しかったです。

学校の帰りに、他のホストファミリーの生徒、デンマークの生徒でボウリングに行きました。ホームステイを引き受けた先輩たちは英語をすごく上手に話していて、デンマークの生徒たちと楽しそうに会話している所を見て、私もあのように話すことができるようになるため、頑張ろうと思いました。英語を上手く話すことが出来ない私にも、クリスタや他の生徒たちも話しかけてくれて、嬉しくなりました。ホストファミリーとしてクリスタを家に泊める最後の日は、学校が終わった後、先輩の家にみんなで集まって夕食を食べました。デンマークの生徒たちとも色々な話ができたり、とても楽しかったです。だけどもうすぐお別れなんだとおもうとすごく寂しくなりました。

始めは不安がとても大きかったけれど、この 1 週間はとても楽しい時間になりました。実際、ホームステイを引き受けてデンマークの生徒たちと交流していくうちに私自身も、英語力が鍛えられたと思います。このような機会はなかなかないので、ホームステイを引き受けることができてとても良い経験になったと思います。教科書を見たり、先生などに話を聞くだけでは学ぶことができないような、文化の違いや考え方の違いを知ることができました。もともと興味のあった国際理解活動にもっと興味を持つことができました。

２－５　松嶋　亜香里

今回のプログラムで私が受け入れをしたのは、Johanna という女の子でした、彼女とは、このプログラムを通して初めて知り合い、実際に合う前に SNS を利用してコンタクトをとっていました。しかし、それをしていても英語に対して苦手意識のある私にとって、たった 5 日間という短い期間で仲良くなれるのかがとても不安でした。

1 日目。飛行機の到着が遅れるというトラブルもありましたが、無事 Johanna に会うことができました。家に帰って、お風呂の使い方を説明するときに早くもうまく伝えることができず、しどろもどろになってしまいました。色々話したかったけれども、この日は夜遅かったので、必要最低限の会話を交わして 1 日目は終了しました。

2 日目、3 日目、4 日目は一緒に学校に登校しました。デンマークの人たちは、学校では授業参加、部活見学、日本文化体験など、さまざまな事をしていました。授業参加で Johanna は、ほとんど私のクラスの授業に参加していたので、そのたびに彼女と話をし、少しずつですが仲良くなっていく

ことができました。ただ、その中でも SSH の授業はグループワークだったのですが、うまく英語を話すことができず、日本人だけで作業をしている感じになってしまい、申し訳なかったです。

部活見学では、硬式テニス部の人たちとラリーをして楽しんでいました。けれども、Johanna は参加しようとしなかったので疑問に思い理由を聞いてみると、テニスが苦手らしくボールがラケットに当たらない、と言っていました。私もそうなので、意外なところで共通点を見つけました。

夜は、ボウリングをしたり、パーティをしたりとより親睦を深めました。個人的には、ボウリングをするにあたり予約等は私がやったのですが、デンマークの人たちだけでなくホストの人たちにも楽しんでもらえたので、とてもうれしかったです。また、パーティはみんなとお別れする前日に開いたのですが、まだその時は、明日にはお別れだという実感が全くありませんでした。始めから分かっていたけれども、5 日間というのは本当にあっという間でした。始めは仲良くなれるかとても不安に思っていましたが、そんな心配は必要ありませんでした。英語に苦手意識を持っていて、消極的になっていても、相手から歩み寄ってきてくれたし、聞き取れない時はゆっくり話すか、単語で区切って分かりやすくなるように工夫をしてくれました。そんな彼女のおかげで仲良くなれたし、お別れをするときには泣いてしまうくらい彼女が好きになりました。彼女に貰ったプレゼントは、大切にしていきたいと思います。

２－６　源地　美幸

四日目の放課後に、デンマークの留学生とホストの生徒、希望した生徒で交流会をしました。お菓子を食べたりお話をしたりして英語に慣れる良い機会になったと思います。ホストの方が慣れているせいか、他の生徒とはあまり話していなかったりということもありましたが身振りも交えて積極的に話しかけている生徒もいました。留学生は日本のお菓子はあまり美味しくないと言ってチョコレートなどを食べていました。交流会の間はずっと同じグループで話が尽きることもあったので変えたりしても良かったと思います。私の居たグループには共通の趣味のある子が居たみたいで結構盛り上がっていたのでその子が居て留学生も楽しそうで良かったです。向こうの国のしきたりやプライベートなことなど色々話して、始まる前は時間が長すぎるのではないかな、と思っていましたが終わる時間になると意外と短く感じました。最後に贈り物で渡した記念品も喜んでくれていました。写真もたくさん撮れて良かったです。日本に来て「可愛い」という言葉を覚えたみたいでみんなが写真を撮った後必ず「可愛い～」と言って楽しそうでした。

クラスに交流に来た時は、日本語とデンマーク語を教えあいました。アルファベットなのに英語

とは全然違って発音が難しく、全く何の音を発音しているか分からない単語もあり、交流会の後も練習したりしました。留学生の子も日本語が難しいらしく何回も聞いたりして頑張っていました。元々「こんにちは」や「ありがとう」など簡単な言葉は知っていたみたいですがデンマーク語に聞いたことのある言葉は無かったです。向こうの学校では三カ国語の専攻が必然らしく、私が話した人は英語、デンマーク語、ドイツ語を専攻していると言っていました。デンマーク語はドイツ語と良く似ているらしく、話せる人も多いようです。

放課後も自分たちで募集をかけてボウリング大会をしました。去年デンマークに留学した三年生も来て大人数でしました。とても上手な人も居てみんな楽しく盛り上がれました。

最終日の夜はホームパーティーでみんなが集まって各自食べ物を持っていきました。食事が合わなかったのか小食なのかあまりみんな食べていなかったです。日本料理、お茶なども口にしないでピザやコーラなど自分たちに馴染みのある物を食べていました。その後はゲームや雑談などしましたが、やっぱり友達とかたまってしまうことがあったのでもっと英語を話せたらな、と思いました。たくさんの交流を通じて、生の英語に全く触れたことが無かったのですがやっぱりホストなので自分が言いたいことを伝えないと、という気持ちから始めよりは話せるようになりました。自分の言いたいことを伝えられると嬉しいし、自分から話したいと思うようになり、英語に対する思いが変わったと思いました。

フレデリクスハウン高校との SSH 授業について

２－６　森部　加蓮

合同授業一日目は、水質に関する滴定実験を各班に分かれて一緒にしました。実験内容は、水質について、生物を用いた水質浄化実験や有機物量（COD）の測定についてなどでした。実験手順や、実験内容、実験結果などをデンマークフレデリクスハウン高校の生徒たちに英語で伝えるのは、単語が思い浮かばなかったり、どのように説明いたらいいのかわからなかったり、大変な面もありましたが、時々先生たちの力を借りたり、みんなで頑張ったりしてフレデリクスハウン高校の生徒たちに伝えようと努力しました。伝えることができたときはとてもうれしかったです。今回した実験は普段の授業ではなかなかできないような実験だったのでとても楽しかったです。

合同授業二日目は生態系サービスの概要について勉強しました。まず、清水先生の話を聞きました。干潟を中心にした話でした。話の後に、実験をした班と同じメンバーで生物多様性の定義、生

物多様性の価値、生態系サービス、生態系サービスの経済的効果、生物多様性劣化の要因などを、パソコンで調べて学習をしました。

合同授業三日目は大阪大学大学院工学研究科の村町尚先生の特別講義を受けました。講義内容は、食物連鎖、一次生産、栄養段階、乱獲、エコロジカルフットプリントなどについてでした。また、英語での講義でした。知らないことも多いうえに、英語での講義はなかなか慣れていなくて、講演の内容が理解しにくかったが、英語の講演を聞くという機会はなかなかないのでいい経験になりました。また、パワーポイントでの講演だったので図や絵があり、英語が理解できなくても理解することができるときもありました。

４　アジア・オセアニア高校生フォーラム　【11 月 4 日～6 日】

昨年度日高高校 100 周年記念行事として開催した『アジア高校生フォーラム』をもとに、今年度は和歌山県が主体となり、県民文化会館大ホールにて『アジア・オセアニア高校生フォーラム』が開催されました。アジア・オセアニア 20 カ国の代表が集まり、『津波・防災』『グローバル化と観光』『経済成長と環境問題』について発表とディスカッションを行いました。日高高校からは『環境問題』と『津波・防災』について発表を行いました。フォーラムに先駆けて行われた日高高校での分科会には、インドネシア、中国、ネパール、フィリピン、韓国、マレーシアの 6 カ国の代表者が参加し、歓迎式、レセプションも併せて開催しました。日高高校のフォーラム委員は、分科会等日高高校での行事の運営に加えて、5 日のフォーラム当日の運営、6 日の世界遺産ツアー（高野山）などに積極的に参加しました。参加生徒の声を紹介します。

１－５　森本　みゆき

今年初めてフォーラム委員になったが、去年よりも深くフォーラムに関わることができ、たくさんの経験ができた。得たものもあった。中学生の頃、授業の一環として中国やマレーシアの人々、台湾の人々と交流する機会があったのだが、緊張や恥ずかしさもあり、思うように交流できずいつも気まずい時間になった。特に、ゲームとかではなく自由に話していい、という時間は、何を話せば向こうも答えてくれるのか全くわからず難しかった。フォーラム委員になれば交流の機会が増えると思ったので、中学校の時に感じたもどかしさを克服しようと考えフォーラムに参加した。

実際、交流の機会は多かった。特に楽しかったのは、日高高校での歓迎レセプションだ。私が座ったのは、大連の生徒やネパールの生徒の前だったので、いろいろなことを聞いた。最初は『何を話せばよいのだろう』と黙ってしまっていたが、大連の方から話しかけてくれ、それからは話しやすかった。ネパールの人もずっと静かにお菓子を食べているので、どうしようと思ったが、質問をすると詳しく答えてくれるし、笑顔もとてもすてきだった。ただ、自分のコミュニケーション力と英語力のなさははっきりとわかった。他の席のように話して盛り上がることができなかったので、やっぱり話題の振り方とか反応とかは難しいと思った。また、質問に答えてくれたときも、何を言っているのかわからず反応できない。もっと深く聞きたいと思うことがあっても、英語でどう言うのかわからないなど、困るときが多く、勉強しなくてはと反省した。もっと実践的な使える英語を習いたい。

全体会では分科会よりも多くの国々の発表が聞けた。Conclusion の部分で、『みんなで協力し合うことが大切』ということをよく見かけた。各国それぞれが問題を抱えていること、その解決には国を超えて取り組んでいかなければいけないことを再確認できた。高校生が社会の問題についてプレゼンし、意見を言い合うのは、とても意義のあることだと思う。フォーラムの場で挙げられた問題は、すでに大人たちが考えて解決しようと取り組んでいるものかもしれない。でも、高校生もその問題を知ることで、大人が考えつかなかったアイディアが出るかもしれないし、自分たちの世代が大人になったとき問題意識の高い人が多ければ、解決のためにすぐ行動できると思う。だから来年からもフォーラムは続けて欲しい。これからは、問題提起やその解決法を考えるだけでなく、解決策を実行していったら良いと思う。発電など、大規模なものは無理でも、環境や災害の対策法を考えて生徒主体で実行し、それを発表できたら具体的になると思う。

日高高校のフォーラム委員全体の活動を振り返ると、桑原さんの講演もとても面白かった。偏見のない目で見ることの大切さを学ぶことができた。外国人というだけで、自分は身構えてしまっていたが、この講演を聴いていたおかげで、そんな思いは少なかった。同じ高校生なんだと思うと、堂々と発表している様子を見た自分もがんばらなくては、と感じた。フォーラムの前に桑原さんのお話を聞けたのはためになったと思う。今回フォーラムに参加できて本当に良かった。外国人の方との交流が楽しいと思えたので、目標は少しは達成できたと思う。2 年生の人たちが中心となってがんばってくれたので、1 年生はとても楽だった。来年も時間に余裕があればまた参加し、発表者などの役割についてみたい。

２－４　飯田　ゆきえ

今回のフォーラム全体を通して、私は『発信する力』が大切で、これからにとても必要なものだなと思いました。外国の生徒は、自分の国の現状や課題についてよく考えて発信していました。また、分科会では、投げかけられた質問に対して間を置くことなくすぐに自分の考えや現状を答えていました。そのことに、私はとても驚きました。また、すごいなと思いました。

全体会では、分科会の時よりもっと多くの外国の生徒たちが来ていました。だから、たくさんの人と交流することができました。でも、周りの人たち皆

が自分の言葉として英語をしゃべっていて、とても速かったので、あまり聞き取れませんでした。もう一度尋ねたり、身振り手振りで説明したりしたのですが、やっぱりどうしてもわからず、また、通じないこともありました。私ももっと英語を自分の言葉のようにスラスラとしゃべれるようになって、もっと深い交流がしたいと思いました。

高野山研修では、私自身も、和歌山のことについてよく知ることができました。ネパールの Kinjalk と話をしたのですが、ネパールの寺院のことについて話してくれました。私は説明できるほど日本の寺院のことについて知らなかったので、日本人として、もう少し日本のことを知らないとなと思いました。またここでも、英語が使えないことで困りました。質問されたことに対して答えようとするのですが、単語がわからなかったり、質問されたことに対して答えようとするのですが、単語がわからなかったり、表現の仕方がわからなかったりで、結局、あいまいな返事になってしまいました。やっぱり自分の考えを伝えるには、まず英語が話せるということが、とても重要なことだと強く思いました。

私はこのフォーラムでたくさんのことを学ぶことができました。外国の私と同い年くらいの生徒たちが自分で自国のことを考え、発表している姿を見て、私ももっと自国のことを考え、堂々と発表する力が必要だとすごく感じました。そして英語力の必要性です。前にも書きましたが、このフォーラムを通して英語力がいかに必要であるかがわかりました。11 月 4 日～6 日までの間、外国の人たちと交流して英語に対する意識が少し変わったように思います。今まで何となしに聴いていた洋楽も、その歌詞や意味を調べたりするようになりました。これからももっと英語力を上げていきたいなと思います。

これからも、このようなフォーラム活動を続けて欲しいと思います。

５　JENESYS 2.0 中国高校生訪日団　来校　【12 月 11 日】

平成２７年度中国高校生訪日団短期招へい事業の一環として、中国湖南省株洲市南方高校と、同市第十三高校から高校生２８名が来校しました。6 時間目に 1，2 年生の英語の授業に参加した後、会議室で交流会を開き、放課後は箏曲部、茶道部、弓道部の見学と体験をしました。

１－４　椋野　蓮

歓迎会の後、部活動を紹介するために訪問団の皆さんを弓道部へ案内しました。すると、彼らは、周りで行われている部活動のことや、弓道についていろいろ質問してきてくれて大変親しみやすく感じました。部活動の紹介が終わって、集合場所に連れて行くとき、他の柔道部が見てみたいということで柔道場へ行ったのですが練習が休みで、代わりに剣道部を見学しました。

部活動を紹介したり、体験してもらっているとき、みなとても興味津々でした。僕は、中国の人は反日感情を持っているというイメージを持っていましたが、彼らはそのような様子は全くなかったです。

１－５　硲間　千央

今回の交流で私が課題だと思ったことは単語の知識とリスニング力です。せっかくの交流の場だったのに、1 回の会話を理解するのに何分もかかってしまいました。Yes や OK! と言えても、道を教えるときや臨機応変な対応をしなければ行けないときに焦ってしまうことも多々ありました。

筆記の英語ができてもそれを会話で使えないと意味がないと思うので、もっと英語でのコミュニケーション力を高めたいと思いました。そのためには相手の話を正確に聞き取って理解し、それから自分の考えを伝えることが大切だと思います。次はいつこのような交流をできるかわかりませんが、それまでに少しでもこれからの力を高め、楽しく会話することができるようにしようと思います。自分の課題を知ることのできるいい場となりました。

１－５　森本　みゆき

私は、今回、授業参加や歓迎会、クラブ体験で、中国の生徒の方と交流しました。特に私の所属する箏曲部に来て、箏の演奏を体験してもらったことが、とても楽しかったと印象に残っています。そこでは、日本の古くからの歌である「さくら」「荒城の月」を演奏し、実際に練習をしてもらいました。箏は元々中国から伝わったものであり、それを日本人から中国の方に伝え返していると考えると、不思議な気持ちになります。日本の文化の美しさ、さらには自国の文化のすばらしさを、再発見する機会になればうれしいです。また、担当した男子生徒はとても熱心に練習していて、箏を楽しんでくれているのかもしれないと思いました。文化交流はまず楽しむことから始まると思います。それから、深いこと、たとえば歴史や背景などを知ってもらえれば良かったのですが、私はそれを伝えるだけの知識と英語力を持っていなかったので、できませんでした。深い交流のためにはそのどちらも必要だと感じました。互いの文化を良いものだと認め合うことは、相互理解の一歩です。そのためにも、次はもっと知識と語学力を身につけ、多くの良さを伝えたいです。

２－１　　池永　朱里

中国から 2 校の学校の生徒が日高高校に来てくれました。国際交流委員である私は中国高校生訪問団と今までにないくらい交流する機会がたくさんありました。私のクラスの授業にも参加してもらい、グループに分かれて訪問団の方々と話をしました。しかし、こんなに近くで接したのは初めてで、頭に言いたいことが思い浮かんでもなかなか口に出して話すことができませんでした。また自分の言いたいことを英語で言うことができず悔しい思いもしました。しかし、この悔しい気持ちがあったからこそ、さらに英語を勉強したい気持ちが強まりました。自分の考えを表現できる力をつけたいと思いました。

そして私はこの体験を通し、アイコンタクトの大切さがわかりました。お互い話がうまく通じなくても目を合わせると心が通じているように感じ、笑顔で会話をすることができました。異国の自分と同世代の人たちと交流できたことうれしく思いました。

7　さくらサイエンスプラン　【12 月 13 日～17 日】

さくらサイエンスプランは、産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指して、科学技術振興機構が実施しているプランです。

日高高校には、ブルネイ、ベトナム、モンゴルから高校生が 2 名ずつ参加し、日高高校の生徒たちとともに近畿大学生物理工学部で講義を受け、実験を行いました。テーマは “Genotyping of rice plants using PCR”, “Observation and staining or mammalian oocytes”, “Segregation of proteins through gel electrophoresis” の 3 つでした。

その後、兵庫県の SPring8 の施設を見学し、日高高校に帰ってからは、国際交流委員の案内による地域の散策、授業参加、まとめの発表などを行いました。

以下は、参加者の感想です。

「科学に対する興味や知識が、以前より高まりました。また、大額の教授や、一緒に学んだ学生さんたちが、すべて英語で指導、会話していたので、英語力はこれからもっと必須になってくるなと感じました。今回の研修は本当にいい経験になりました。科学も英語も、もっと自分で学んで視野を広げていきたいなと思いました。これからも、このような活動を続けていってほしいと思います。また、他の科学的な施設への見学も行うといいと思います。」

「英語を使いながら、実験をしたり科学的に考えるということは、今まであまりしたことがなかったので、おもしろかった。普段あまり興味がわかなかった分野のことに触れられて、広い視野で考える大切さがわかった。今後も続けてほしいと思う。」

6　マレーシア　SMK　SEKSYEN 9 来校　【2 月 12 日】

和歌山県の紹介で、マレーシアの SMK　SEKSYEN 9 校の教育旅行団を受け入れました。6 時間目に 1, 2 年生の英語の授業に参加し、会議室で歓迎レセプションを開催しました。放課後は箏曲部、茶道部、弓道部を見学してもらい、日本文化にふれながら交流を行いました。

編集後記

2015 年度も、日高高校はたくさんの機会をいただいて、海外の学校と交流を持つことができました。皆さんは、授業やクラブで海外の高校生と接する機会はあったでしょうか。ここに掲載している感想では、「英語でのコミュニケーションが難しかった」「相手の言っていることがわからなかった」などの声が多いですね。でもそこで終わらずに「がんばって話せるようになりたい」「もっと日本のことや地域のことを知ろうと思う」という前向きな思いにつながっていることが本当にうれしいです。

各クラスの国際交流委員の皆さん、箏曲部、茶道部、弓道部の皆さん、生徒会の皆さん、本当にありがとう。皆さんのおかげでそれぞれのプログラムをスムーズにすすめ、来校した方々に日高高校の良さをたくさんお伝えることができました。来年度も、国際交流に興味のある多くの生徒が交流活動に積極的に参加してくれることを願っています。

そして、ここに紹介している以外にも、個人的に国際交流に取り組んでいる生徒の皆さんがいます。ブルネイやスペインを訪問する県のプログラムに参加した人、個人的に短期留学にチャレンジした人、文部科学省の『トビタテ！留学 Japan プログラム』に参加した人、それぞれが多くの学びを得たこと思います。また 2016 年夏に短期留学を控えている人もいます。

皆さんの未来を開くのは皆さん自身です。このような国際交流の機会がそのきっかけになればと願います。

日高高校　教育開発部